

モーターサイクル・ダイアリーズ

2005(平成17)年2月11日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★★



監督＝ウォルター・サレス／出演＝ガエル・ガルシア・ベルナル／ロドリゴ・デ・ラ・セルナ／ミア・マエストロ／メルセデス・モラーン／ジャン＝ピエール・ノエル（日本ヘラルド映画配給／2004年イギリス・アメリカ合作映画／127分）

第3章

じっくり、しっかりと

……チェ・ゲバラといえばキューバ革命。大学時代多くの学生のおこがれた人物だ。そんなゲバラは23歳の時、革命とは無縁の医学生。その時代、彼は革命家である前に単に何かを求めて旅する若者だった。この映画の原作は、彼の青年時代の日記だが、彼の純粹さと鋭い感性、そして何よりも差別への憤りと人を愛する楽しい才能が印象的。「2005朝日ベストテン映画祭」5位入賞もダテではないことがよくわかる。怒ることや感動することの少ない今のニッポンの若者に是非観てもらい、自己と他者との関係すなわち自己の社会的あり方を考えるきっかけにしてもらいたいものだ。

ブエノスアイレスとアルゼンチン

23歳の医学生エルネスト（ガエル・ガルシア・ベルナル）の自宅はブエノスアイレスにあり、ここで両親や兄弟たちとともに何不自由ない生活をしてきた。ブエノスアイレスはアルゼンチンの首都で、^{ウオン・カーウアイ}王家衛監督の映画『ブエノスアイレス』（97年）などで有名。

そしてアルゼンチンという国は、ミュージカルの『エビータ』やアラン・パーク監督の映画『エビータ』（96年）で有名だ。

エルネストが7歳年上のアルベルト（ロドリゴ・デ・ラ・セルナ）とともに旅行に出かけようとしているのは1952年のことだが、この時代アルゼンチンを支配していたのはペロン大統領。労働者階級の支持を受けて1946年に大統領に就任したものの、国内外の不満がうっ積し1955年にはクーデターによってこのペロンは

失脚することに。そして、その後登場したのが『エビータ』で有名な妻のエヴァだ。だから、1952年という年は激動の時代が始まる前の「嵐の前の静けさ」だった時代……？

キューバ危機とは？

1962年の「キューバ危機」を描いた映画が『13デイズ』（00年）。「キューバ危機」とは、カストロが1959年にキューバで樹立した革命政権をめぐる「米ソ冷戦」の象徴となった大事件。

すなわち、ケネディ大統領率いるアメリカ合衆国は、自国の喉元に突きつけられたようなキューバの革命政権を転覆しようと狙い、他方、フルシチョフ率いるソ連はキューバに中距離弾道ミサイルを設置して直近からアメリカを牽制しようとしたことから「キューバ危機」が発生した。

その詳細は是非『13デイズ』（『シネマルーム1』63頁参照）を観てほしい。

カストロとゲバラ

キューバ革命を成功させたカストロは、その後今日まで50年近くずっとトップの座に座り続けているが、つい先日、演説終了後倒れてケガをした話は有名。毛沢東をイメージするまでもなく、いくら偉い人でもあまりに長期政権が過ぎると……？

それに比べると、ゲバラはたく短い人生でカッコいい！ さしずめ日本でいえば高杉晋作か……？ 1956年にカストロと出会い、キューバ革命に参加してこれを成功させ、革命政権の要職を歴任したゲバラだったが、いつまでも権力の座にとどまらず、1965年にはアフリカのコンゴ闘争に参加した。

さらに1966年からは、南米ボリビアでのゲリラ闘争に参加しこれを指揮したが、10月8日逮捕され、翌10月9日に39歳の若さで処刑された。こんな潔いゲバラの生きざまに世界の若者の人気が集まったのは当然……。以上、カストロとゲバラについての坂和流うんちくをひとくさり……。

エルネストとアルベルトの「併走」

映画では冒頭字幕が流れ、そこには「これは偉業の物語ではない。同じ大志と夢を持った2つの人生が、しばし併走した物語である」と書かれてある。1952年1月から7月まで、半年以上にわたって南米大陸を南から北に12,425キロを「併走」したのは、エルネストとアルベルトの2人。医学生であるエルネストの専門はハンセン病で、気晴らしはラグビーそしてぜん息持ちというキャラクター。他方アルベルトの夢は外国を旅することであり、自らを「放浪科学者」と呼ぶ、ちょっと変わった人物。2人の共通点は、冒険心と情熱の魂そして旅を愛する心。

今回の旅行計画は4カ月で8,000キロ走ること。方法は行き当たりばったり、目的は本でしか知らない南米大陸の探検、移動手段は「怪力（ポデローサ）II号」という1939年式のノートン500というバイク。掛け値なしにそれだけの旅行計画だ。しかし、この半年間の「併走」からエルネストが得たものは……？

若き日のゲバラにとっての旅とは？

この映画の原作は、ゲバラ自身が自分の体験したオートバイの旅を記した『モーターサイクル・ダイアリーズ』と『チェ・ゲバラ モーターサイクル南米旅行日記』。

ゲバラがカストロと出会い、キューバ革命に参加するについて、最初は従軍医としてであったことを私ははじめて知ったし、ゲバラがぜん息持ちの医学生だったこともこの映画を観てはじめて知ることができた。彼が大学生になってすぐに始めた、原動機付自転車を改造した「怪力号」^{ポデローサ}による南米の旅は何のためだったのか？それは、自分は何者なのか？人のために、社会のために何ができるのか？と純粋に考えたゲバラが、その「何か」を求めるためのものであり、その旅こそが彼にとって唯一意味のある行動だったはず。

この映画で観るゲバラの人間性

この映画に描かれたアルベルトと「併走」した1万キロの旅が、彼の純粋な心と若い感受性に多くの刺激を与えたことは当然だろう。

クスコで見たインカ帝国の遺跡マチュピチュの威容や、目的地の1つであったハンセン病施設における3週間のボランティア活動から受けた刺激も大きかったが、ゲバラが最も大きなショックを受けたのは、共産党員であるために追放され、やむなく旅を続けているインディオの夫婦や、危険な鉱山で馬や牛のように働かされる原住民たちの姿だったようだ。

もっとも、ゲバラはもともと共産主義等の思想性を持っていたわけではない。自らを「激しい男」と称していたが、それはむしろ、若さのために融通がきかず、自分を偽ることができない「頑固さ」を表現していただけたもの。

29歳のアルベルトは、「ウソも方便」と割り切り、酒、ダンス、女を楽しもうという現実主義者の側面をもっていたが、ゲバラにはそれが全くなし！しかし、こんなゲバラも人を愛する気持だけは人一倍だったようだ。特に、医学生として人の役に立ちたいと思う気持は、死の直前にある老女を助けられないもどかしさや、ハンセン病施設においても存在するさまざまな差別やそれを強要する古い制度に対する反発心としてスクリーン上に表現されている。

まさにこの映画は、23歳の若き医学生が『モーターサイクル・ダイアリーズ』に記したきわめて率直で真面目な、差別への憤りをみずみずしくスクリーン上に描き出したものだ。

革命家と人間性

そして、ゲバラのこの人間に対する興味が、カストロとの出会いの中で革命に向かっていったということだろう。多くの人々が親しみを込めて「チェ・ゲバラ」と呼ぶのは、ラテン・アメリカの地を歩き回っていたこんな若き日のゲバラの親しみやすい人間性によるものだ。

パンフレットにある作家の戸井十月氏の「“チェ”・ゲバラの遥かな旅」によれば、ゲバラの旧友たちに対する「チェ・ゲバラという人間の、最も優れた資質は何だったと思いますか？」との質問に対しては、皆口を揃えて「人を愛する才能です」と答えたと書いてあるが、このやりとりは何とも感動的！

有名で立派な(?)革命家はたくさん存在するが、ゲバラのように人を愛する才能を持った革命家は果たしてどの位いたのだろうか……？

堂々のベストテン第5位

朝日新聞社主催の「朝日ベストテン映画祭」というものがある。これは1958年に始まり、2005年は第47回目。2003年12月から2004年11月まで関西の劇場で公開された映画の中から選ばれた外国映画のベストテンにおいて、堂々第5位に選ばれたのがこの『モーターサイクル・ダイアリーズ』。1位『オアシス』、2位『ミスティック・リバー』、3位『殺人の追憶』、4位『グッバイ、レーニン!』をみれば、そうそうたる作品ばかりだ。また、6位『モンスター』、7位『ニューオーリンズ・トライアル』等と比べてみてもすごいもの。

この映画祭は多少マニアックな傾向があるかもしれないが、それを差し引いても、第5位入賞は立派なもの!

アカデミー賞は?

これに対して第77回アカデミー賞では、さすがにこの映画は作品賞や監督賞にはノミネートされなかったが、立派なことに脚色賞とオリジナル歌曲賞にノミネートされた。オリジナル歌曲賞はあまりピンとこないが、脚色賞はなるほどピッタリと思えるもの。

いくら革命と関係のない青春時代とはいえ、アメリカ合衆国にとっては今も敵対している(?)キューバの「革命の闘士」ゲバラの青春時代を描いた映画が、アメリカのアカデミー賞で脚色賞を獲得すればすごいもの。是非アメリカの「懐の広さ」を見せてもらいたいものだ。

2005(平成17)年2月12日記